す。

※「選択的医療」：治療に値しないいのち

小林の評伝などでは，「第五の医学」について，現在の生命倫理，尊厳死，ホスピス活動等のつながりを見出し，「選択的医療」のさきがけとして再評価する向きもありますが，私は医療者としての小林の思想的限界だったと考えています。しかしこれは，小林の重症児医療・福祉の開拓者としての功績を何ら減じるものではありません。すべての医療から見放されていた重症児とその家族の思いを受け止めた医師は，この時代，ほとんどいなかった事実を忘れてはなりません。「法の谷間」に置かれた重症児の問題を社会に提起し，施設づくりに取り組んできた実践的ヒューマニストである小林をして，ここまで追い込んでしまった社会の貧困な福祉政策こそ，厳しく問われなければならないと思います。

近年，出生直後から気管切開を受け，人工呼吸器を装着し，意識ははっきりしないが，ときに反応らしきものが認められる，そんなふうに“元気に”生活している超重症児が増えてきています。たくさんの医療機器に囲まれた生活が日常の風景ならば，「選択的医療」の導入は「死に向かわせる」圧力として作用しかねません。「選択」は大切と言い，また人権尊重を装いながら，実は重症児を“治療に値するいのち”と“治療に値しないいのち”に線引きし，切り捨てる議論につながるのではないかと危惧しています。

引用・参考文献

・全国障害者問題研究会（2003）『完成台本　療育記録映画　夜明け前の子どもたち』，全障研第37回全国大会（滋賀）田中昌人記念講演資料
・高谷清（2011）『重い障害を生きるということ』岩波新書
・小林提樹（1975）『福祉の心』自費出版
・明神もと子（2015）『どんなに障害が重くとも―1960年代・島田療育園の挑戦』大月書店
・国立西多賀療養所（1967）『重症心身障害児（者）の手引き　第2集』
・小林提樹他（1964）重症心身障害児の解剖経験．小児の精神と神経，第4巻3号
・高谷清他（1975）『障害者医療の思想』医療図書出版社

Column ③　療育記録映画「夜明け前の子どもたち」

「夜明け前の子どもたち」は，1967年4月から翌68年2月にかけて，第一びわこ学園と第二びわこ学園の取り組みを撮影した記録映画です。

こんなナレーションから始まります。

「わからないことが多すぎる。しかしこの子どもたちも，人に生まれて人間になるための発達の道すじを歩んでいることに変わりはない。そう考える人たちがいる。障害をうけている子どもたちから，発達する権利を奪ってはならない。どんなにわからないことが多くても，どんなに歩みが遅くても，社会がこの権利を保障しなければならない。そう考える人たちがいる。」

そして，「びわこ学園の療育活動に映画が参加することになった」と言い，一貫してカメラをまわす側の視点でナレーターが語りかけます。

映画といっても，シナリオどおりに被写体を撮ったものではありません。撮影したフィルム，録音した音声を，「園」と「映画」の人びとが一緒になって見直し，聞き直して，子どもたちが表す行動の意味を理解して，さらに撮影を進め，編集を行いました。そうした制作プロセスを経て，「わからないことが多すぎる」障害の重い子どもたちも人間発達の道すじを少しずつ歩んでいることを明らかにしていこうとしていました。

完成した映画は，自主的な上映会などで広がっていきました。

制作から半世紀をへた今日も，障害のある子どもたちの発達と教育について考えようとする人びとの学習の場で上映が続いています。

監督　柳澤寿男　　監修　糸賀一雄
製作委員会委員長　田中昌人
上映時間　2時間